

繪本白狐傳

七

遠
2501
10-7



遠
2501
10-7

徒らに心ざらぬ
業をなす者生かす
我ぬ所にて

加運加運能題

借
本尾銀

北邨芳



阿屋加志譚卷之七

法橋玉山戲作俣畫

悪徒幽霊の出會いの語

悪右衛門が徒保憲の家を殺し、
加茂の館を北へ出て、車坂ちうく急ぐ頃ハ九
月晦日の夜、暗く、摺墨を、物の文も分
かぬ時、ぬ電光、雷神の地へ下り、
物とて、時刻に寅中なり、夜あけぬ間、寓居



幽霊の巢を護る



明もあけく先の風雨雷電の烈しくしつとふと寺
 僧等嘆ふく更よるるなり狐や化されたるも
 あぶく結つて皆同と見え合あはれさうさびも
 けし相も安奈に加茂館より騷のありしも志
 らく寝入りありくも蕩首さく目を開く
 見れぬあはれ女房と唯さう綾の襦袢上は錦乃
 衾引つてまよふの奢つるよ驚と居直りて女よ
 向ひし何のしつとる由末のさしつとる兔

斗象をらで愛しあふや抑あふ何人か地
 御館は何もふしやう女は笑く恥づ
 しつとあはれ妻ハ赤よ若く情けりし豊子
 あはれ母よあはれや東海に恵みの嬉し礼
 るせん奴隷りくゆきまはしつとあはれ
 ぞら宿よ一夜をあしあうつとあはれ
 いわも安奈懐き聞とらるる母君とあはれ
 上は將清原の赤入の方よあはれ



めぐりせむ此頃楠のりくも花の葉より首首曼のよみ
 かゝるも由縁ありげふもろしくわし偽令狐も
 あれ身てもみよいつくあししゆゑハ再び逢てんらん
 りや下は遺捨人も情ありし是より直ま信太は信
 り思あをしかるも聞も志えんとおらんご妻の首
 ねあふりし情をやたね候めんよまゑあはれ
 りのやうも告あゝ後まあんと急どく加茂乃
 館はまはれりうれむこハいよ男保憲夫婦をとり

二郎高保興惣勘平其外の男女あはれく斬殺され
 血流も家内子歎き殺もいふも形勢も魂魄
 へ飛散心神碎り方ハ慄も泣く涙も叫ぶもわ
 びるもあはれ言もいふも首首の葉わ
 りるも何者の仕業もかゝるもあはれ
 をアせりし天を仰ぎ地は伏する涙の血は
 とももあはれ集りてあはれ



山
谷
の
景
色



あがらふべき人ありし。將成僧の心をももあたらしし。
り。よしあき偽るるをばはるるなりし。叙し。冥途の
父母よあせしむべき人なり。身をあしむるははは
つむを彼僧をわくわくし。汝らもあつめ。あまをよ
成し。抑家姓ハ首名ハ今し。い号を伯道人とらるるの
をり。今をよる。二十二年。大虚を飛び。都乃
く。遊び。に汝が母湯子加茂河の流に。あま
を洗ふ。其睡の白く肥脂つる。よ。系道心教礼し。

飛行の通を失ひ。保憲が鉢を客より。凡半年。系
え。六根情を通し。お。汝が母よ。交接。い。ん。ん。暗し
く。仙情通し。終に汝を。暗し。五十八月。い
産。お。ハ。系。迷。え。帰。し。仙。道。再。成。出。る。の。時
お。い。れ。ん。ふ。さ。れ。ば。生。る。母。も。ま。つ。ざ。れ。ん。汝。が。夫。の。父。ハ。お。あ。つ
か。や。故。よ。系。姓。の。口。冒。ハ。あ。つ。を。掌。中。に。握。り。生。れ。出。る。て
保。憲。が。胤。を。ぬ。證。あ。れ。ふ。り。し。汝。が。母。を。よ。る。り。
日本國王朱雀天皇。養平四年。甲午。夏。四月。癸亥。陰陽司

神しん俱く生せい神しんの諸しよ神しんの相さうの樹じゆ妖まじを祈いのすべし
異い鳥ちう来らいす拙ちやくをりく。天てん皇わう此こゝ相さうの樹じゆを取とり禁かぎす
入いる魔ま魅ま其その向むかひより入いる。其そのれゆゑ災わざはひ禍わざはひをあらはれ給たまはる
因いん縁えんありて卒すまに起おこる害わざはひのよし。比ひ汝にらり此こゝ難がた
をのぞく。其そのれゆゑ仙せん血ちゆうをあらはる女めあり
る。道みちを道みちをまじひ。俗たんぱん人ひともあは難がた死しせ
る。便べんありて此こゝ所ところをたねとせ。今いまより後のち三年さんねん
が程ほど此こゝ所ところより清きよ浄じやう齋さいとせ。俱く生せい神しんと

祈いのらば害わざはひの轉ま福ふくあり。天てん下かは希まれあり奇き見けんを
魚うまに歎なげかす止とどま。又また訓しんを以もつて聞きゆる。昔むかしより世よの
涙なみだを流ながす。妻つまを失うしなはる。又また御ご八はち伯はく道どう人ひとは。悔くわいし
今いまも露つゆを流ながす。官くわんありて。假たふ令しんを以もつて。又また
何なにをも疑うたがはる。此こゝ年とし月つき音ねを。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。
まじりて。此こゝ年とし月つき音ねを。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。
わきと報うへん。八はちか。最も朝あさを。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。
嬢ぢやうを。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。保たも憲とす。



夏の筆龍宮城外の復生神と祀ふ

母もつゝも黄泉の鬼もつゝも夫の安奈も雷の雨よ
 行方なきなりまふ盗賊の伴を叙れや
 親も夫もあつたの中よあつて憂き
 死をやらぬ外何の望のさむくも
 乃かたりゆひ泣ハ便ありまふは伯道人ハ
 心を拍く大なる笑ひおとあつた造化陰陽の理を
 知ればよもあつた歎こも可笑くは汝が夫安奈よは夜
 白狐の附きし護るまふの災難をよ遊る

今も無事よ京師よあり汝安奈も伴よ身を全し
 父母の仇をむらひ天神地祇の怒りもあつた両親の亡
 魂を慰んハ嬉しびや聞ゆるお扱ハ安奈のまふあつた
 都のまふおとや人の難よ死まひよ妻がけし
 一知るまふびは頭石の強き女性あればさむやん
 一歎こもあつた道人の通カよ都よ
 安奈よあつたまふしとかさむくと道人の汝が
 月三まの厄ありよ旧郷よゆりまふよ安奈も伴よ難



安奈再以安倍野之位

此里よき〜機をうの婆より〜業を〜量行
とれば美田をうらら〜中にな〜かせ〜も取
〜と。邑中のりら〜お〜布買糸需〜商人のり
ひ。あふぬハ整〜銀河の織女のお〜すな〜牛〜殿
ゆ〜とれ〜感〜遠近より〜中〜出入の〜り
つ〜自家も豊〜富〜田畑も買〜けつる男
女も〜と〜し〜ゆびの重〜朝〜首の〜方の
た〜びお〜梅の〜のいつ〜終〜まら〜候〜月満

てまうし〜ゆの男兒を産夫婦のうのいつ〜優曇曇
より〜つ〜まの童〜か〜たの〜あ
〜し〜馬鹿〜物〜り〜力物〜奴

阿也可笑譚卷之七終

